

## 第14回新生匠瑳戦略会議 会議録

開催日時：平成24年2月29日（水）

午後7時15分～9時15分

開催場所：八日市場ドーム選手控室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘、萱森孝雄、越川竹晴、越川八代枝、鈴木和彦

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（13人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、橋場永尚

（2人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）木内課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

### 1 開 会

### 2 あいさつ （省略）

### 3 議 事

#### （1）提案書（中間報告）について

[議長]

去る2月15日に、A委員の事務所で私とB委員、A委員、事務局で、中間報告作成に向けた打合せを行いました。資料「中間報告作成スケジュール」のとおり、進めていきたいと思えます。「中間報告書 目次案」は、先日の打合せを踏まえて私なりにアレンジを加えたものです。次に、A委員に作成していただいた「匠瑳市のまちづくり戦略＝“自分たちごと”戦略」の図、そして、事務局に作っていただいた資料があります。

先日行った打合せでは、B委員、A委員のアイデアを頂きながら、基本的な考え方を整理し、資料を作成しました。本日やるべきことは、中間報告のたたき台を作成するために、基本的考え方の説明、事前をお願いした宿題に対する各委員の発表、それらをもとに盛り込むべき内容の整理・共有をすることです。これらの結果を踏まえて中間報告（案）を作成したいと思います。それを次回会議（3月22日）までに提示し、最終チェックをかけたいと思えます。最後に修正等を経て、市長へ提出する予定です。

市長への提出は年度内ですか。

[事務局]

年度内でお願ひします。

[議長]

わかりました。

まず、A委員に作成していただいた資料ですが、基本的にはこの図が一番大事で、ここから応用させていながら、次のステップに進むことになると思います。この図に、先日行った打合せの基本的考え方が集約されていますので、A委員に説明をお願ひします。

[A委員]

打合せを行うにあたり、今までの会議録を全て読み直し、そこから要点となる「戦略会議で話し合ったことによる成果」についてマーカーでチェックしました。特に、何をどう変えていかなければならないのか、という観点から皆さんの意見や提案をチェックし、それらを総合的に考えたときに、これからの匝瑳市をどういう方向性で考え、どうしていったらいいのか、それらにある程度の共通性が見られることがわかりました。それらをまとめたものが、この図です。

この図の大枠から説明しますと、中央から左右に分かれていまして、図の左側は、行政依存、あきらめ感が蔓延している現状と、市民がどう発想を変えていかなければならないのかを示したものです。図の右側は、「自分たちごと」の市民によるまちづくりを推進するためには何が必要で、そのために行政がどう役割を変えていかなければならないのかを示したものです。それらがどういう関係性を持ち、どこに到達したらいいのかを矢印で表現しています。

図の左上の方から書いてあることを説明します。叱られることを承知で言いますと、何となくまちが繁栄していて、特に困っていない感じで今までやってきているという現状があります。事実上低迷状態が続いていますが、それを本人が自覚したくないので、自分の問題としてとらえていないため、行政に任せればそれでいいという受け止め方をしているのです。つまり、打つ手がないし、行政に依存することが当たり前の状況から、実際に動きがないので、あきらめ感が蔓延している状態です。このままいくと、人もいなくなり活気もなくなって、本当に打つ手がなくなってしまうので、そこをどう止めるか、という話を展開していきます。J T跡地や旧飯高小学校などの問題に対するアプローチが、図の左上2つぐらいの発想で動いてしまっているわけです。つまり、J T跡地を本当にどうにかしたいという気持ちを持った人が、どうにかしたいということを考えていません。誰かに考えてもらおうとか、あるいは、自分とはとも

あれ、こういうものがあつたらいいのではないか、というぐらいにしか考えていませんので、その先に進む必要があります。

では、何をきっかけにどのように進めばいいのでしょうか。まず、課題に対して自分が当事者であることを自覚しなければなりません。自分ごととして、どうすればこのまちが発展していくのか、という可能性を模索していくスタンスでのまちづくりにシフトしていかなければなりません。また、そこで終わってしまってもだめで、その問題を社会化し、「自分だけ」のこととして考えるだけでなく、「自分たち」のこととしてとらえるという状況を作り出す必要があります。市民のスタンスとしては、自分たちごととしてまちづくりに関わっていくことが求められているのではないか、という内容が図の左側で展開されています。

では、そういう現状の中でどうしたらそこまでシフトしていけるのかを考えなければならぬわけですが、それを横線の矢印で示しています。

あきらめ感が蔓延している状態から、どうしたら可能性を模索するスタンスに変えていけるのでしょうか。匝瑳市もよく見てみるとまんざらでもなく、宝がいっぱいあるということをしっかり感じることができれば、いろいろな可能性が見えてくるはずですが。しかし、「匝瑳市には何もない」「何かしても変わらない」と思ってしまったから、その先に進むことができないわけです。では、可能性を模索するスタンスをどうしたら持てるのでしょうか。

図の右上を見ていただくと、「誇りうる匝瑳の文化を讃え合う運動」ということで、例えば、C委員のトウキョウサンショウウオのことや、D委員の福祉のサークル活動などが、それぞれ「いいものだ、素晴らしいものだ」と皆さんで共有するきっかけさえ作れば、「打つ手なし、あきらめ感蔓延」という現状を打破できるのではないか、ということを示しています。

また、その下に「地域のあきらめごと、困りごとを共有する運動」とありますが、どこかで誰かが困っている、あきらめている問題に対して、それをどこかの誰かの問題にせず、みんなの問題としてとらえるきっかけを作らなければなりません。例えば、E委員は飯高のことを自分ごととして悩んでいるわけですが、それについて外野が「ああすればいい、こうすればいい」とか言うだけではだめです。さらに言えば、E委員が一人で悩んでいることもだめで、そこにみんなで考えようという環境を作っていく必要があります。もっと言えば、問題を社会化していく段階では、コミュニティを完全にオープンにしろという意味ではなくて、閉鎖的でもかまわないので、そのコミュニティに少しでもその人の視点を入れるとか、よその人の手を借りるとか、外との関係を築く努力も必要であるということを示しています。

そういうことをするとき、かつての学者や教師、お坊さんが担ってきた文化を讃え合う人「内なる伝道師」が必要で、その人たちの力を借りて、このまちには力があるのだということをいつも讃え合っていることが必要です。それと、地域のあきらめごと、困りごとを共有していくという意味でも、地区外・市外の人「ヨソ者視点の伝道師」を積極的に受け入れて、その人たちの力を借りることも必要です。行政の役割は、「内なる伝道師」「ヨソ者視点の伝道師」を確保しながらそれらを地域に派遣し、問題を解決するための取組みを支援していくことで、それを「自分たちごとを支える中間支援機能」としています。結論として、行政は今まで官主導でまちづくりを進めてきましたが、そうではなくて、市民が自ら答えを出せる仕組みづくりを支援することにシフトしていかなければならない、という整理をしています。

その結果、匝瑳市のまちづくりとしては、「自分たちごと」の市民と「自分たちごと」の行政が、お互いに働きかけて共鳴するパートナーシップを築くことを想定しています。こういう考え方でJ T跡地を見たときに、どういう姿が見えてくるのかを皆さんで話し合う必要があるのではないかと、ということの説明するための資料です。

[議長]

先日の打合せでこういう考え方を整理したわけですが、この資料を作成するにあたり大きな影響力をもったB委員から補足をお願いします。

[B委員]

この図の左側と右側で視点が違うわけですが、右側の行政の視点で見ると、矢印が点線になっています。従来の行政は、この点線が実線として表に出てしまっていて、これがないからといって左側の図にシフトできないということではだめなのです。

「ヨソ者視点の伝道師」とは、例えば、A委員のような地元の人には気づかない視点で意見を述べてくれる人のことです。「内なる伝道師」とは、地元で励ましてくれる人、応援してくれる人のことです。それら内外の視点をつなげていくのが行政の役割で、それが表に出ず、あるとき気づいたら図の左側にいる市民を強力にサポートしている、あるいは、それらのありがたみがわかりお互いに感謝している、そういうふうに循環していくことが望ましいと思います。少なくとも、結果より、この図のとおりに行くことと幸せを感じられるようになることが期待されます。

まず、跡地が利用されるかどうかという前に、自分たちが当事者になって、自分の意見で何か動きが出て、それを応援してくれる人がいるという状態になると、幸せを感じられるようになります。ここが重要だと思います。

[議長]

図の左上にある「かつての商業・文化の繁栄」と「打つ手なし、あきらめ感蔓延」

の部分をとって、右側にある「自分たちごとを支える中間支援機能」を最上部に移動させ、それを頂点に三角形をつくると、その中に個別課題を入れていくことができます。それが個別課題ごとに作成した別紙のシートです。

私なりに見方を変えていくと、「打つ手なし、あきらめ感蔓延」は現状のことを言っています。その上にある「かつての商業・文化の繁栄」は、現状をどうやって作ってきたのか、歴史や社会構造の変化も含めて、その要因となっています。これらの対応策として、従来どういうやり方をしてきたかという、行政が補助金等を使いどんどん肥大化していき、市民もそれに依存していく、そういうかたちでずっとやってきたわけです。

今回、この図で新しいのは、右側の「中間支援機能」で、これをまちづくりに活かしていこうというのが、いま流行のやり方でもあります。中間支援機能として「内なる伝道師」「ヨソ者視点の伝道師」に、違った視点でものごとをとらえてもらい、地域でのあきらめごとや困りごとを、価値あるものにしていくプロセスが重要になってきます。例えば「内なる伝道師」の例でいうと、飯高檀林を単なる古い寺ととらえるのではなく、E委員のようにそこに現代的な価値を見出していくような活動を支援していくことです。

この図だけ見ると少しわかりにくいかもしれませんが、これについては皆さんいかがですか。

[A委員]

例えば、C委員のトウキョウサンショウウオの活動や、D委員の福祉の輪を広げる活動、F委員のネギの取組み、E委員の檀林の活動など、すでに何らかの活動をしている人たちにとっては、この図を説明することができると思います。なぜなら、自分たちが図の左側において、「自分ごと」の部分に入りかけている、あるいは、すでに入っているからです。理解を進めるために、先ほど特定の方のお名前だけを出しましたが、この図をどうとらえたかということをお話していただければ、このまちの具体的な事例として理解できるのではないかと思います。

[議長]

E委員は、すでに「自分ごととして可能性を模索」しているわけです。その際に、「内なる伝道師」や「ヨソ者視点の伝道師」と何らかの接触がありましたか。

[E委員]

飯高檀林コンサートに20年以上関わっていますが、東京から来た歯科医師の方の影響を受けています。その方にいろいろな問題を提起されて、檀林コンサートをやろうというときにも「コンサートを開催してどうしたいのか」などの指摘を受け、最終的

な目的も改めて明確になりました。準備の段階でも、東京から演奏家を呼んでいただいたりして、現在開催している檀林コンサートも、その方（「ヨソ者視点の伝道師」）がいなければ、ありえませんでした。

[議長]

C委員は、ヨソ者視点で見えていますか。

[C委員]

私はもともとヨソ者です。ただ、匝瑳市に住んだ関係で、自分の家の周りに田んぼがあって、ホテルがいて、市原市の高校に勤務している先生が「匝瑳市にはトウキョウサンショウウオがいるので、案内してくれないか」と言われたのが、活動のきっかけでした。何もないところだと思っていましたが、豊かな自然があることに気づき、これを調査していこうということになりました。図の左側は何となくわかりましたが、右側の「行政」とつながる部分は、今まであまりありませんでした。こうした活動を通して、自分たちの住んでいる場所を誇れるようになってきました。

[議長]

従来の市民の感覚だと、何にもないところで「困りごと」だと思っていたことが、価値化されているわけです。そういう役割を、C委員が果たしていたことになります。

D委員もヨソ者ですよ。

[D委員]

私もヨソ者ですが、自分が楽しんでやりたいというところから始まったのがきっかけです。当事者である障害者を巻き込みながら動き始めたら、自分たちの活動範囲である海匝エリア以外からも参加してくれる人が増えてきているので、「自分ごと」として活動していくと、自然と輪が広がっていくのだと実感しました。今後は行政との関わりも重要になってきますが、実際どこにどう相談したらいいのかがわかりません。

「うちではやっていませんから」と断わられてしまうケースがけっこうあります。

[A委員]

それは、行政が主体的に何かをする立場でしかものごとを考えてこなかったからです。活動を支援してほしいと市民から相談があったとしても、活動を支援する立場をあまり経験してきていないので、行政がそれにどう対応していいかわからないのです。変えていきたいのは、まさにそこですよ。

[議長]

G委員は地元の方ですが、いかがですか。

[G委員]

まさしくこの図のとおりだと思います。以前、市の郷土史担当の方に伺った話では、

江戸時代の八日市場の街中にはたくさんの方が来ていたということです。特に、多田屋さんの前に薬師寺の石像がありますが、そこに近隣から人が多く集まっていたそうです。また、旧道から匝瑳高校に上がっていく道などの街の姿も、当時とほとんど変わっていません。中央地区の商店街は、当時からそんなに手をかけないまま、ぬるま湯暮らしで歴史を刻んできているのかもしれない。

また、先日ある本を読んでいて気づいたことは、匝瑳市のいいところはやはり豊富な自然や歴史ある文化財が存在するところです。しかし、それらをそのままにしておくのではなく、そこへ付加価値をつけてブランド化していくような戦略が求められているのだと思います。

[議長]

資料の目次案を見ていただきたいのですが、これは先日の打合せの内容を踏まえて作成しました。これは行政の問題となってしまいますが、Ⅱの「懸案事項形成の背景と要因」の⑥に書いてありますが、江戸時代までは地域の問題を自立的に共同体内部で解決していました。それが近代化していくなかで、問題が社会化していき、自立的に解決できなくなってしまったので、今度は近代化した行政が解決していくことになります。少なくとも明治時代から近代までは、あくまで中央集権的な上から下へという考え方だけで、地方自治という概念はありませんから、資料の図のように「自分ごと」として自立的な活動をしていくという感覚は市民にありません。行政がどんどん肥大化していき、補助金を出していくことに市民が慣れていくと、行政依存が当たり前になっていきます。

資料の目次案でいうと、Ⅱの背景と要因のところで現状にふれ、Ⅲで新しいまちづくりの仕組みを提唱していくこととなります。その中で、図と目次案について説明すると、「打つ手なし、あきらめ感蔓延」というのはまさに現状で、これは急に出てきたものではなく、そうになっていった背景・要因が必ずあります。その要因としては、目次案Ⅱの①～⑤で、これらで海岸侵食、檀林、里山、廃校など、個別課題のほとんどが出そろってしまいます。廃校問題も人口減少に関連して出てきますし、人口減少は生産年齢の減少と一体化していて、同時に高齢化へとつながっていきます。そうになると、農業・商業・工業のどれにも言えることですが、一番の主軸になる人が減っていくわけです。特に、農業の場合には、そのまま産業構造の変化にも影響してきます。農業が衰退すると、里山を維持していくことが難しくなり、自然破壊にもつながっていきます。産業構造の変化は、商店街の衰退・大型店の進出にも影響し、それは漁業の構造にも関わってきます。「おっぺし」をやっていた人たちが、長い堤防で漁港を造ったり、侵食を止めようとヘッドランドを造ったりしたことで、砂の供給が絶たれて

しまったわけです。そのころ、同時にまちも都市化され、県道飯岡一宮線の道路の下には、どんどん住宅が建っていきます。これらに対し、行政は補助金等で対応してきたわけですが、それが限界に達してきているので、新しいまちづくりの仕組みや解決方法が求められているのだと思います。そのなかで、市民協働などの考え方が出てきているので、B委員やA委員のアイデアを頂きながら、懸案事項の解決につなげていこうというのが、本日の会議の趣旨です。これに異議のある方、またはわからないという方はいますか。

[A委員]

「よくわかった」という状態にはなりにくいと思います。なぜかという、例えば、JT跡地に常設的な軽トラ市をやったらいいのではないかというアイデアが出たと思います。先ほどの図の考え方をしている人にとっては、なぜ軽トラ市が出てきたのかがよくわかりません。アイデアとしてはユニークかもしれませんが、なぜそれがいいと思うのか、どういう必然性があるのかが理解できません。一方、軽トラ市が良いという考え方を持っている人からすると、図の意味がさっぱりわからないことになり、こういう論争があってしかるべきだと思います。

[議長]

これは行政内部にも言えることで、行政も大きく転換せざるを得ないわけです。今までのやり方をそう簡単には変えられないという職員もけっこういるのではないのでしょうか。先日の打合せのときも、この考え方の違いでかなり議論をしました。

[A委員]

打合せのときに議論したことは、結局何に使うかという具体的な答えを出さなければ戦略会議として立つ瀬がないのではないかと、という考え方と、考え方を整理して自ずから答えが出る状態を作らなければ、たとえ答えを出したとしても失敗の繰り返しになるのではないかと、という考え方があったためです。この論争はこの場で消化してしまわないと、現場にいない人間が机上で考えたものだけで、具体的なものは何一つ出ていないという批判には耐えられません。私は自分の考えでこれらを説明できますが、戦略会議としての考え方を整理し、それを委員全員が共有できていないと、結局人ごとの報告書が出来上がってしまいます。その議論をぜひしていただきたいと思います。

[議長]

事務局は、市役所内で今の考え方について説得できますか。

[事務局]

会議の発足当初から、求められているものは結果だったわけです。今は、そうでは



ないということで方向転換していますが、当初は全国の成功事例を発表していただき、その中から何かできそうなものがあれば、という考え方もなかったわけではありません。しかし、会議を経ていくなかで、事業を継続していくため、良い方向に持っていくために、本当にそれでいいのかという疑問が出てきました。「自分たちごと」として、市民も行政もパートナーシップをもってやっていけるものでなければならないと思っています。

[議長]

市民と行政のパートナーシップについては、対等な関係でなければなりません。あるいは、市民オンブズマンのような対抗的な要素があるぐらいがいいのかもしれませんが、そのような関係を匝瑳市で実現できるのでしょうか。

[事務局]

委員長のご指摘のように、この図の考え方を理解してもらうには、それなりのエネルギーや手続きも必要だと思います。しかし、こういう方向でやっていかなければならないという意識は必要だと思います。

[B委員]

対等というよりは、持ち味が違うと理解した方がいいと思います。匝瑳市には伝統的な「共同」が古くからありますが、これを「協働」に高めるという視点は意外と新しいので、閉鎖的な部分は認めつつも、少しずつオープンにしていけばいいのだと思います。ヨソ者というのも悪くとらえるのではなく、逆に使ってやるぐらいの考えで、非常に田舎的には合っている仕組みなのです。これを一般的な市民協働ととらえて、一気にこういうコミュニティを解放していこうとすると、無理が生じます。田舎的な要素を持ちつつ、少しずつ自立を図っていくことが望ましいと思います。

[議長]

ただし、旧飯高小学校を巡る動きを見ても、結局、E委員たちの活動は閉じてしまいましたよね。

[E委員]

あれ以来いい勉強になったみたいで、旧飯高保育所については、前に地元から出した要望書のとおり、行政と一緒に施設を使いたいという要望を出したと聞いています。ようやく、自分たちが動かなくてはだめだということに気づいたのだと思います。

[事務局]

私の方にそういう話はきていませんが、具体的にそういう話が出てくれば大きな一つの動きになります。それは戦略会議に報告して、その中でどう考えられるのか、現在はフローの流れに乗って進んでいますが、地元で自発的な意思が出てきているとい

うことを、委員の皆さんがどうとらえるかということになります。

[議長]

イメージとしてこの図は理解できるのですが、具体的なイメージが湧かないのは「内なる伝道師」で、確かにかつては教師やお坊さんがその役割を担っていたのだと思いますが、現在この役割を担っているのは具体的にどういう人たちなのでしょう。

[B委員]

例えば、先ほどE委員が言っていた歯科医師の方が「ヨソ者視点の伝道師」ですよね。逆に「内なる伝道師」とは、地域に長年住み続けているおじいさんととらえてもよくて、この人たちがE委員の活動を讃え合うことで輪が広がっていきます。伝道師というときらびやかな人がいると思いがちですが、ごく普通の人のことで、その人たちが励まし続けてくれると、E委員は元気になっていくわけです。

[議長]

地域の中で、長老や古老と呼ばれていた人たちは、今はどうなのでしょう。

[B委員]

長老というのはきらびやかな人ではなくて、気のいいおじいちゃんがいいのです。もっと言うと、H委員のような人がいい、というイメージです。

[事務局]

そういうことであれば、地域の活動などを良く理解してくれている人はいると思いますので、そういう方が発言できるような雰囲気や場の提供が必要だと思いますし、それは行政の役割なのかもしれません。

[F委員]

おそらく、発表する場の有無は別として、どの地域にもそういう方はいると思います。私の住んでいる地域でも毎年祭りがありますが、そこで発言する人たちはいます。しかし、それらの発言や考え方が地域の外に広がっていかないだけで、そういう考えを持っている人は、市内にけっこういるのではないかと思います。

[議長]

あえてネガティブな発言をしますと、E委員は地元では少し変わっている人だと思われていると思います。それを地元で讃える人というのは、むしろ反対に回る方が多いかもしれません。

[F委員]

やはり好き嫌いはあると思います。発言する人たちは、好かれもするし、嫌われもするので、どっちが多いかということによって動きが変わってくるのだと思います。

[E委員]

檀林コンサートのときもそうですが、私が一緒にやろうと誘ったときに、しばらく考えてしまうような人はやりませんよね。「いいね」と言って、すぐに入ってくる人でなければ活動は続きません。こういう活動は、例えば、祭りに参加してやみつきになってしまうことと一緒だと思います。そういう感じで檀林コンサートの実行委員は集まっているので、確かに変わり者だと言われるかもしれませんが、悪いことをやっているわけではないので、別に気にしないという人がほとんどです。

[A委員]

伝道師というと人のことを指しているように思われがちですが、必ずしもそうではなくて、伝道師のような役割が必要だということです。F委員が言われたようなことを考えれば、そういう地域での活動が良いと思っても、それをなかなか発言する機会がないわけですよね。そういう人たちが、意見表明できる場を作ること自体が伝道師の役割を果たすわけです。

この図を市民病院に当てはめると、市民病院の構造がよく見えてきます。市民病院で働いている医師も看護師も、何となくあきらめ感があつたのかもしれませんが、いろいろな評価はあるかもしれませんが、事務局長を外部から「ヨソ者視点の伝道師」として招いて、改革しようとしているわけです。「内なる伝道師」とはI委員のような方で、心の中では一定のクールな目で見ているかもしれませんが、市民病院を愛した一人として常日頃から気にかけていらっしゃるわけです。

市民病院の問題は、市民全員が市民病院に通えば解決するのに、誰かが行けばいいと思っているから患者さんがいなくて困っているのです。このように当てはめていけば、市民病院で何をすべきかが見えてくると思います。それを先取りしているのが、昨年提出した意見書なわけで、意見書の内容もこの図のとおりになっているはずですよ。

なんでそうなるかということ、11回分の会議録を読み返してみたら、この図が出来上がったからです。皆さんが考えていることも、きっとこの図の中に凝縮されていると思います。ここから先は、図を理解したら終わりではなくて、この図を理解した上でJ T跡地をどうとらえるかということに対して、答えを出さなければなりません。何を造るかではなく、何かを造ることによって市をどう変えていきたいか、あるいは、こういう市にしたいからこれを造ろうとか、その「何か」というのは最後の結論として出てくるものです。そのプロセスを全く経ずに結論を出そうとしているので、まずはそこを考えることによって、少なくともJ T跡地に関する戦略会議なりの提案がまとまるのではないかと思います。

[議長]

A委員の発言に沿って、議論を前に進めましょう。

よくわからないのは、旧飯高小学校の問題については、「自分ごと」として地域で共有できていました。J T跡地については、市長の頭の中や戦略会議では問題になっていますが、街中の人たちには共有されているのでしょうか。

[事務局]

困りごとという観点から言えば、本当にJ T跡地が必要だったのかという話になると思います。行政側にはそれなりの取得理由があったとしても、市民側にそれがあつたかという疑問が生じます。

[議長]

私もそれを感じています。戦略会議、市長、行政、議会では共有されていますが、市民にとってはどうでもいいという印象を受けました。問題意識が共有されないと、前に進めない気がします。

[A委員]

商店街の方ご自身が、J T跡地をチャンスととらえられるかどうか、共有という意味ではそこがまず一歩だと思います。委員長がおっしゃるように、J T跡地については、誰にとっても何の問題でもありません。ただ、税金が無駄遣いされているということで気になっているだけですよね。このことだけが問題だとすると、すぐに売却して現金化することが最も有力な選択肢だと思います。

[J委員]

この図は良くできていて、ほとんどの問題はこの図に当てはめていけば解決が見えてくるのではないかと思いました。そこで、J T跡地の問題で困っているのは誰かと考えたときに、行政しか思い浮かびませんでした。ここで具体的なことを考えるより、まずは自分ごととしてJ T跡地を使ってくれる人を探すことが必要なのではないのでしょうか。

[H委員]

3月10、11日にJ T跡地でイベントがあります。「内なる伝道師」である私も、匝瑳市のために1時間のステージをいただき、仲間と一緒に歌うことになりました。おじさん・おばさんの集まりで、こんなことをやってもしょうがないかもしれませんが、ボランティアで皆さんが少しでも元気になればと思っています。まちも徐々に活性化されているみたいで、S☆cuteという小中学生のご当地アイドルが匝瑳市をPRしようと頑張っているのです、私も応援しています。

[事務局]

今回で3回目のJ T跡地を使った単発イベントになります。どちらかというとまだ行政主導型ですが、今後はまちづくり元気隊が中心となって、いろいろとやっていか

なければなりません。この単発イベントがきっかけになり、図のプロセスを経てやっていくことができれば、少しは変わってくると思います。

[B委員]

今回の宿題部分は、答えを出すということではなくて、J T跡地を例にしてプロセスを考えてみるということだと思います。私たちはこの図を理解していますが、今度は皆さんが伝道師となって説明できなければなりません。答えではなく、考える習慣を身につけることが大事なのです。

[A委員]

先ほどH委員が「こんなことをやってもしょうがない」と言っていました。そんなことはなくて、やっていること自体は価値のあることで、それが讃え合うことにつながると思います。そこで、J T跡地のことに切り替えて考えてみると、なぜイベントをやろうとするときに、最近ではJ T跡地を使うのか、それに対してはいろいろな理由や期待があります。そこに新店しようと思っている人たちは、J T跡地の持つ何らかのポテンシャル（潜在能力）を感じているからです。そのポテンシャルが、J T跡地の価値ですよ。その価値をとらえれば、自分がやりたかったことも「あの場所ならできるかもしれない」ということが徐々に誘発されていくので、J委員の言われるような人が登場してくる可能性があるわけです。いろいろな価値を見出し、J T跡地を使いたがる人がいるのであれば、あのまま更地にしておいた方が何にでも使えていいという可能性も否定できません。

[B委員]

そういう考えでいけば、すごくきれいなトイレが一ヶ所あって、人が集まりやすいということであれば、いろいろな人が自分ごととして1年間アイデアを出して行って、その中で企画するということもあるかもしれません。

[F委員]

私の考えでは、使いたいから使っているのではなく、無駄で使わなければならないから使っているようにしか思えません。J T跡地が無駄で存在するがゆえに、何かしら使わなければならないから使っているというだけで、そのイベントは他の場所でもできるわけですよ。市役所駐車場やのさかアリーナの方が駐車場やトイレも整備されているのに、わざわざ何もないJ T跡地を使ってやっている理由がわかりません。

[K委員]

J T跡地も、今は暫定利用ということで単発イベントをやっていますが、新店している人たちの中には無料で運営できている人がいるのではないのでしょうか。もちろん無料ではなくて、テントの購入費用等ですでに税金が先行投資されているわ

けです。それを考えると、他の場所で開催した方が費用もかからなくて済んだのではないかと思う部分はありました。購入したテントも、イベントが終わった後はおそらく使い道がないでしょう。ご当地アイドルのS☆cuteにしても、最初は音楽事務所的な発想があってそれを選んだのだと思いますが、そこから先のことはあまり見えていない気がします。イベントがあるとたまに出てきて、市をPRすること自体は良いことだと思いますが、それぐらいで終わっています。

[B委員]

それは企画者側で、今後どうしていこうという考えはないのでしょうか。少なくともJT跡地については、今まで年3回のイベントを実施してきたわけですから、それらをきっかけにいろいろなアイデアや活動が出てくるのではないのでしょうか。

[K委員]

この図は良くできていると思いますが、私が少し疑問に思う部分は、「自分たちごと」としてとらえて活動できる人が、市民や行政の中にどのくらいいるのでしょうか。F委員が言われるように、地域にはコミュニティがあるわけですが、最近はそのコミュニティ活動にも参加しない人、権利は主張するが義務は果たさないという人がいます。例えば、子どもたちが参加する天神様の祭礼に私も参加しましたが、運営している人はすでに60～70歳の人ばかりで、若い人はいません。市民の意識がまだそういうレベルですので、ここから市民協働を起こしていくのはかなり難しいのではないのでしょうか。

[議長]

先ほどのコミュニティを共同体というふうに言い換えれば、従来の共同体が崩壊しているということです。従来は、義務の部分に強制力が働きました。そういう意味では、一旦壊れかけて、そこに自立した人たちがいるのであれば、自立した人たちの新しい協力関係を作るいいチャンスでもあります。まちづくりの中で、新しい協働ができていく可能性は高いと思います。

[B委員]

従来の小さい共同体から中学校区や旧村というように少し範囲を広げていくと、自立した人たちは出てくると思います。それらを核とし、その核と核をつないでいかないと人は集まらないかもしれません。

[議長]

中間報告書についてはJT跡地を中心にまとめていくことになりますが、それ以外にも旧飯高小学校の資料館構想など、今まで議論してきた部分は入れていきたいと思っています。JT跡地については、地域の問題として共有できていませんので、共有させ

なければなりません。図の右側部分が全然できていないかという、そうでもありません。例えば、商店街復権会議のときに、伝統的な商家の社長さんが熱心に「J T跡地を売ってはいけない」と言っていたことは、「内なる伝道師」としての活動ですよ。そういう人を発掘していき、あるレベルまで到達すると共有が一気に進むような、そういうきっかけが欲しいと思います。それについては、B委員が事前に資料を作成してくださっていますので、B委員から説明をお願いします。

[B委員]

資料「J T跡地利用に関する7つのQuestion」で見えていきますと、まず、課題の認識ということで、どこにどんな問題があるのか、それらの課題を自分ごととして解決するキーパーソンは誰なのか、課題解決のためにはどうすればいいのか、こういう段階を経て考えていくこととなります。

まず、課題の認識で「誰がどのように困っている」のかということですが、これは会議録の中に答えがあります。また、そのなかでJ T跡地利用を巡る「閉鎖的な意識」についても議論されていて、こういう問題を何からどう開いていけばいいのか、他にも課題はたくさん出ています。

では、具体的に課題解決のために元気づけて励ましてくれる「内なる伝道師」は誰なのでしょう。もしかしたら「私」となるかもしれません。H委員は「私」と言いましたよね。そして「私」が「私たち」になるにはどうしたらいいのでしょうか。それは、元気なおじちゃん・おばちゃんの集まりかもしれませんし、E委員になるかもしれません。逆に「外モノの視点」は、先ほどのE委員の話に出てきた歯科医師のように、意外と身近なところにいるのかもしれません。こういうことを実際に考えるときに重要なことは、周りに存在する商店街や農家、高齢者など、いろいろな人や物を編集作業のようにどンドンつないでいくことです。新しいものだけにとらわれず、誇りうる匠の文化、例えば、文化財に指定されている建造物の側でお茶が飲めるような、人がいきいきと動き出すイメージで物語を考えてみるのが大切です。

課題解決の方法として、市民だけではなく行政も、「内なる伝道師」や「ヨソ者視点の伝道師」を連れてきたり、縦割りではなく横のつながりをどうすれば持てるのか、などを考えていく必要があります。

J T跡地の最大のポイントは立地で、立地は変えようがありません。回遊性を考えれば、カインズホームとの連携もあるかもしれません。そういうふうに考えていくことが面白い、と思えることが重要なのです。また、そのようにして出てきたアイデアを否定し合っていてはだめで、お互いに讃え合うことでどンドン元気になっていくと思います。

[議長]

回遊性ということが出てきましたが、里山の景観や木積の伝統工芸の関係では、いろいろな企画をやっていますよね。でも街中ではそれがありません。商店街はかつてオープンだったところですが、今は逆に閉鎖的になっています。街中を歩いてみると、路地裏などで新しい発見があるかもしれません。

この7つのQuestionで一番困るのは、J T跡地について誰がどのように困っているかというところですが、これは市長ですよ。市民が困っているということであれば話を進めやすいのですが。

[H委員]

市民は直接痛みを感じていないので、困っていないのかもしれませんが。

[A委員]

本当は痛みがあります。

[H委員]

市民病院がなくなってしまうたら困りますが、J T跡地がなくなっても特に困りませんよね。

[B委員]

H委員は以前、車が駐車できなくて困っているということを書いていましたよね。

[H委員]

一番簡単なのは、J T跡地に駐車場を整備することです。お金に困っているので、お金をとる方法を考えるのがいいと思います。しかし、周りに無料駐車場もあるので、有料駐車場を造っても誰も駐車する人はいないと言われてしまいます。

[A委員]

市長が困っているというのも、意外とそうではないのかもしれませんが。市長や市の担当者が困っているのは、議会への回答ができないから困っているのもあって、J T跡地があることで困っているわけではありませんよね。実は、市長も含めて誰も困っていない可能性はあります。

[E委員]

議会で無駄だと指摘されているから困っているのもあって、お金があれば持っても何の問題もありません。

[A委員]

放置することで困っているということですが、質問のバリエーションを変えると、J T跡地が銀行になったら困る人はいるのでしょうか、軽トラ市ができれば困る人はいるのでしょうか、こういうふうに考える困り方もありますよね。当事者意識として、困



っていると感じられるかどうかという質問です。

[議長]

7つのQuestionを先に進めてみましょう。次に「閉鎖的な意識」をどのように開いていけばいいのかということですが、いかがでしょうか。

[B委員]

まず、「閉鎖的な意識」があるかどうかです。今まではJ T跡地について、商工会だけ、市役所だけという「閉鎖的な意識」の中で考えられてきましたが、もっと広くとらえて、農村部、駅、高校生なども巻き込んで、それらと連携していくことも必要ですね。

[H委員]

市民に、J T跡地を何に使いたいのかというアンケートをとってみたいかがでしょうか。

[議長]

商店街復権会議のときに出席していただいたNPOのLさんは、シャッター通りとなっている商店街の空き店舗が借りられれば、新たなビジネスを始めたいと思っています。しかし、商店街の人たちはあまりいい反応はしていませんでした。つまり、業種の変更や店舗を開放することに拒絶反応を示していて、あまり変化したくないわけです。

[A委員]

「閉鎖的な意識」を開く方法については、先ほどH委員が言っていたアンケートが有効だと思います。要するに、問題を共有するということですね。何が問題であるかはわかりませんが、問題として存在することは事実ですね。問題としてあること自体、認識していない市民が大半であることも事実です。少なくとも金食い虫になっているという事実を多くの納税者が知ったときに、何が起こりうるのかということを見ない限りは、次に進んではいけないような気がします。答えを出すために、範囲を広げていろいろな人の意見を聞いてみることも必要だと思います。

[K委員]

そのためには、ある程度データを開示していかないと、直接自分のところにはつながりません。1世帯当たりどのくらい負担しているのか、もしそれがなかったら他にどんな使い方ができるのか、そういうデータを示してあげないと、一般の市民にはなかなか理解できないと思います。

[A委員]

確かにそういう聞き方をするのは多分にありえることなのですが、そういうアンケ

一トを戦略会議で設計するとすれば、その時点である程度の落としどころを想定していることとなります。つまり、現金化することが最優先という考えであれば、そういう発想が出てくるわけですが、まだそこまでにすら至っていません。やはり何かを利用したらいいのではないかという気持ちがどこかでまだ捨てきれず、すっきりしないところがあるような気がします。

[議長]

J T跡地については商店街とセットで考えてきましたよね。M委員、銀行以外で何か提案などはありますか。

[M委員]

戦略会議でこれまで何回も議論していて、いまだに市民参加の議論をされていていいのかという疑問はあります。中間報告については、戦略会議としてある程度の方向性を出すべきで、具体的にJ T跡地をどうするかは市長が最終的に判断することです。いずれにしても、その内容は市民に説明することになりますが、考え方にあまり時間をかけすぎると、結局議論が進まなくなってしまうような気がします。

銀行以外でということですが、以前から私も発言していますが、野栄地区の人にとって八日市場の銀行に行くことは、非常に交通の便が悪いので、行きやすい横芝光町の方へ行ってしまいます。これについては、市民からも不便で困っているという話を聞いているので、私も提案しているわけです。銀行も市が相手であれば、交渉しやすいのではないのでしょうか。行政が単独で計画を立てるとなると、何をやったとしても批判は出ると思いますが、少なくとも銀行であったら批判は出ないのではないかと思います。

[議長]

聞きたかったのは、J T跡地については街中の人も興味を示しませんが、野栄地区の人は何かを利用したいという考えはないのでしょうか。

[M委員]

全く興味がないと思います。

[議長]

外から見ているからこういう発想になるのかもしれませんが、地域内の交流の場にしたいとか、そういう意見などはありませんか。

[M委員]

野栄地区の住民にとって興味がないことは当然です。なぜなら、八日市場地区の人でさえ興味がないからです。購入したことすら知らない人はけっこういるのではないのでしょうか。

[C委員]

人口を増やすために、土地分譲しかないかもしれません。

[E委員]

もともと八日市場は市が立ったことが始まりですから、特別に何かを造るのではなく、農産物などいろいろなものを持ち寄って、定期的に市を開くのがいいのではないのでしょうか。

[A委員]

もう時間も迫っていますが、先ほどM委員がおっしゃったことはけっこう期待していた意見で、結局、具体的な解決方法を出さなくていいのかどうかという問いかけは真剣に受け止めて、出すなら出す、出さないなら出さないという覚悟を決めなければなりません。

少なくとも、戦略会議に求められているのは、ある程度具体的な解決策であったことは事実ですが、私が整理したなかでは、解決策まで出すのは軽率であると考えています。この問題をどうとらえるかということについて、戦略会議での結論を出さなくてはならないと思います。

[議長]

私は、ある程度解決策まで出すべきだと思っています。その仕組みについては、B委員やA委員のアイデアである程度見えてきていますが、そのなかで、複数にはなると思いますが、どんな可能性が考えられるのかは提示した方がいいと思います。

J T跡地は立地等を考えると一見簡単に解決しそうですが、一番難しい問題だと思います。しかも、取得方法が必ずしも求めて購入した土地ではないということも影響しています。私は以上のように考えていますが、皆さんいかがですか。

[H委員]

銀行ができればモダンですっきりしますよね。市場ができれば垢抜けないからすっきりしないかもしれません。

[M委員]

銀行に限らず、A委員が言われるように不動産活用もいいと思いますが、市が単独で事業化していくのは良くないと思います。

[議長]

銀行を誘致すると近代的なイメージがありますが、例えば、E委員の活動を古いものだと考えずに、歴史や伝統を現代によみがえらせること、まさに価値化することだととらえると、それは新しいことなのかもしれません。

[D委員]

どちらかに絞らなければならないというわけではありませんよね。

[E委員]

私が地元において感じることは、私たちが住んでいるこの地域で、将来どうやって生活していくのかということです。農家の規模も中途半端なため、それだけでは生計が成り立たず、子どもたちも外に出て行ってしまいました。地元に残っている人は、作った物をふれあいパークのようなところではなく、その場に並べて売れるような場所があれば、農家としては助かると思います。

[議長]

先ほど、M委員とE委員に聞いたのは、商店街で積極的にJ T跡地を利用したいという意識がないなかで、海と山の交流のような場所にしようという発想がないのだろうかと思ったからです。

時間が迫ってきていますので先に進めますが、J T跡地の利用で「外モノの視点」を与えるのはどなたでしょうか。戦略会議もまさに「外モノ視点」なのかもしれませんが、別に外モノでなければならないわけではなく、一旦外に出て何かにふれ、新しいものを持ってくるという考えでもいいと思います。

[J委員]

やはり、不動産屋のような商売でその土地を見る人ではないでしょうか。

[K委員]

現在、市の人口が減少傾向にありますので、基本的には匝瑳市の人口が増えていくようなもののためにJ T跡地を使用し、そういう方向でまちづくりを進めていくというような判断を先にすべきだと思います。

[議長]

7つのQuestionの後半部分は、本日も議論している内容ですよね。私はある程度具体的な解決策も提示した方がいいと思っていますが、皆さんはいかがですか。前回の会議でも聞きましたが、具体的な解決策を提示した方がいいという意見が多かったと思います。

[K委員]

ただし、前提条件として戦略についての説明もないと、単純に戦術だけが出てくるようなことにならないように気をつけなければなりません。

[議長]

具体的な解決策を一つに絞って示すことはできませんが、可能性のあるものはいくつか提示したいと思います。B委員やA委員に作っていただいた考え方や仕組みづくりがメインになるかもしれませんが、そこから応用・発展させて、J T跡地にどうい

う可能性があるのかを示したいと思います。少し強引で荒削りになるかもしれませんが、検討した結果、やはり具体策は入れない方がいいということになるかもしれませんが、とりあえず次回の会議までに中間報告（案）を作成し、皆さんにチェックをお願いしたいと思います。

## （２）その他

[事務局]

次回以降の会議日程ですが、第15回（次回）会議が3月22日（木）、第16回会議が4月26日（木）で、それぞれ午後7時から八日市場ドームで行いたいと考えています。

また、委員報償費についてですが、次回から口座振込にさせていただきたいと思いますので、本日の資料にあります「振込口座連絡票」へ記入していただき、次回の会議で提出をお願いします。

[議長]

わかりました。それでは時間になりましたので、本日の会議はこれで終了となります。

[事務局]

ありがとうございました。

## 4 閉 会